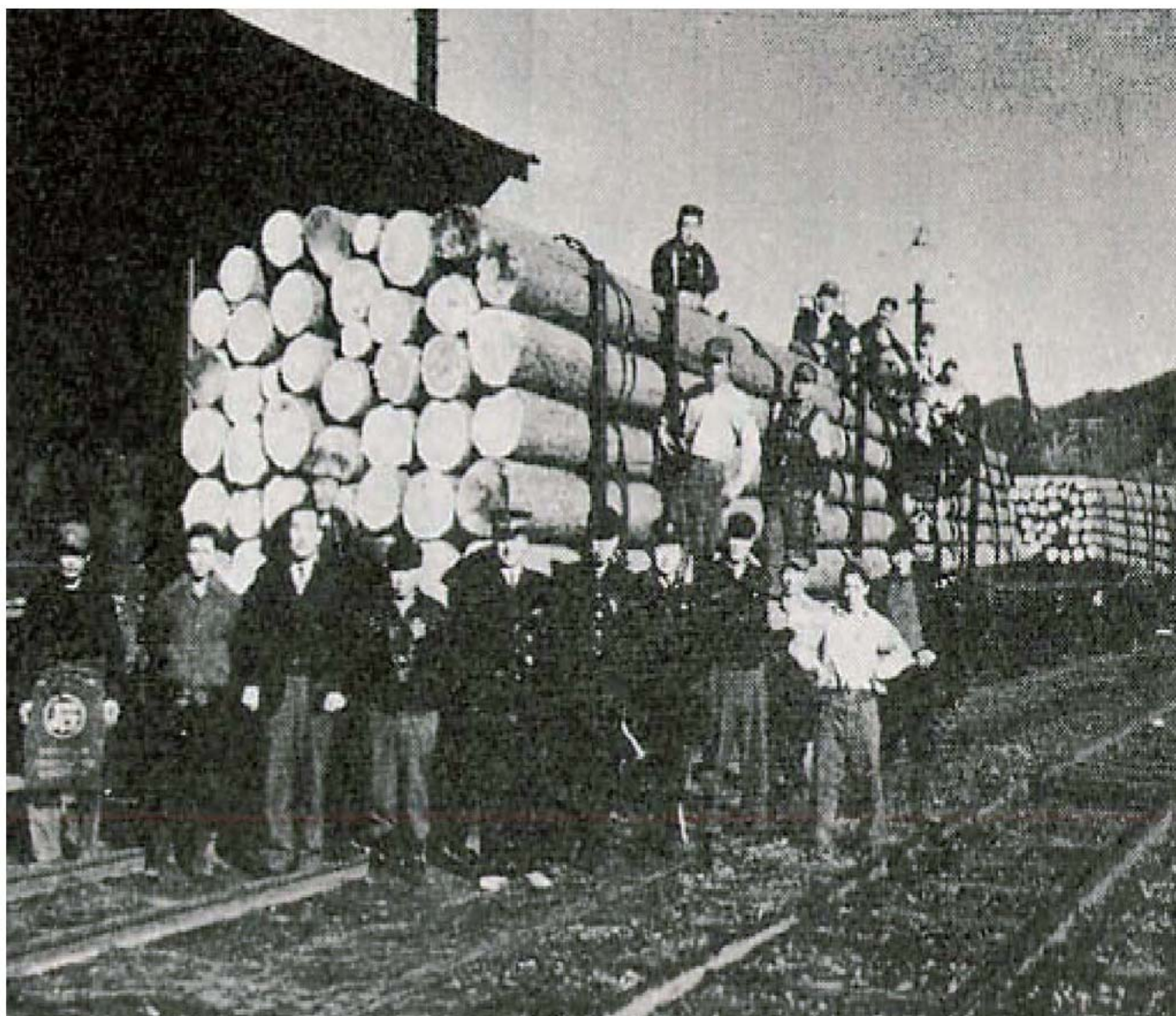


# 昭和30年代の小海線 羽黒下駅



長いカラマツ 15m材出荷します 写真提供：(株) 吉本

## 長いカラマツ材の出荷風景

昭和30年代―現在のようにはトラックがまだ普及していなかった時代。物流は鉄道による輸送が主流でした。

ここでは15mもあるカラマツ丸太がその長さのまま輸送されています。このように長い材木は3両連結された貨車で、鉄道によって出荷されました。出荷範囲は首都圏を中心に、北は北海道から南は九州まで、日本全国に及びました。

15mのカラマツ。そんなに大きなものをどのように使ったのでしょうか。

その用途はカラマツ材の腐りにくく、強度が高いという性質を利用した土木用材です。東京湾や羽田空港拡張に伴う埋め立て工事などの杭丸太として利用されました。埋め立て工事は脆弱な地盤の強度を高めるため、かなりの深さにまで杭を打ち込む必要があるのです。カラマツは杭材としてうってつけの材料でした。

工事から50年以上経った今でも、これらの材は基礎杭としての役割を立派に果たし、縁の下の力持ちとして、私たちの生活を支えてくれています。カラマツという逸材。今、その力は見直され、鋼管杭やコンクリート杭に代わる地盤支持杭としての研究が進められています。